

関連学会印象記

International Symposium on Anaesthesia
for Cardiac Patients (心疾患患者の麻酔に
関する国際シンポジウム)

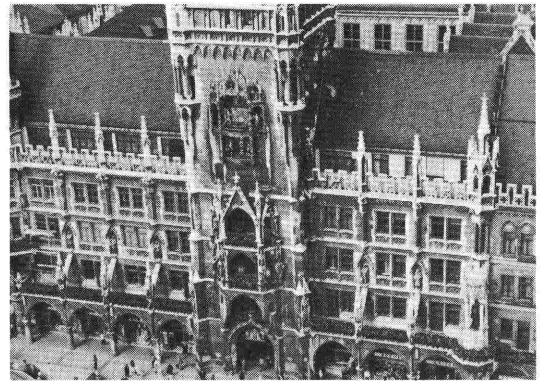
齋藤隆雄*

麻酔と循環、および心臓血管外科手術の麻酔を主題とした学会ないしシンポジウムは、従来各国でそれぞれ別個に開催され、横のつながりとしてはお互いに相手の会に参加する程度のものであった。最近、各国の学会を合同で開催しようという機運がとみに高まり、その最初の試みとして、米国に本拠を持つ Society of Cardiovascular Anesthesiologists (SCA: 心臓血管麻酔医学会) が欧州在住会員の協力をえて、西ドイツのミュンヘンで開催したのが本シンポジウムである。正確には SCA が欧州に出張して聞いた形だが、事実上の米欧合同主催、そして初の国際的な会合であった。

ちなみに、1987年夏に神戸で開催される国際心臓血管麻酔学シンポジウムは基本的には日米合同主催であり、米欧共同のミュンヘンの後をうけての第2回目の国際的な会議という事になる。

会場はミュンヘンフィルハーモニー交響楽団の本拠“Gasteig”であった。タクシーに乗り、へたなドイツ語で行き先を「ガスタイク・ピット」と言って妙な顔をされたときには、フィルハーモニーと言い添えると納得して連れて行ってくれた。会期は9月2～5日、実質中2日半であった。参加者は約600名、欧州各国からはかなり来ていた。米国からの参加は60名前後との事だった。日本からは東京女子医大藤田教授はじめ数名で、全体としてアジアからの参加は少なかった。

それにしても、ドイツの「寒さ」には驚いた。



市長招宴の行われたミュンヘン市庁舎

8月31日の成田は日中の気温が摂氏30度と残暑きびしい一日であった。アンカレッジを経てハンブルクに着いたところ、朝7時の気温は8度、地上勤務者の吐く息が真っ白なのを見て感心した。フランクフルト、ミュンヘンと来ても、気候は似たりよったりで、会期中は日中の最高気温が15～20度、最低気温5～10度。おまけに一日の気温の変化が大きいのである。長袖のワイシャツにネクタイをしめ、上着を着て、そのうえにダスターかスプリングコートがあればちょうどよい位だった。

食事の量にも毎度のことながら驚かされた。私は決して少食なほうではないが、レストランで平均的ドイツ人とおぼしき人々の食べっぷりには到底及ばず、彼らの半分も食べられぬことが多かった。もつとも、彼らは食事に2時間程度かけるのが普通で、日本の速食いのテンポではあのボリュームは無理なのかもしれない。私共には2時間か

*徳島大学医学部麻酔学教室

けて食べる習慣が無いせいか、食事にはなかなか適応出来なかった。

さて、初日は登録に並行して、サテライトシンポジウム2題が行われた。「血行動態モニタリングの最近の進歩」, 「スフェンタニール-心臓血管外科における鎮痛薬」。いずれもメーカー後援の会だった。夕方からは展示会場で歓迎パーティが開かれた。いつものことながら、開会の辞も、来賓の挨拶もまったく無く、なんとなく始まっていつの間にか散会するというやり方だが、それで賑やかで飲み物もごちそうも豊富にあり、顔見知り同士が歓談したり人を紹介しあったりというかたちであった。堅苦しい、長たらしい挨拶がえんえんとつづくよりもスマートで実質的との印象を受けた。

二次会のつもりで訪れた“Feldherrn Keller”という店は伝統的なババリア料理を食べさせることで知られている。売り物のババリア料理は野鳥や鹿の肉をキャベツやジャガイモと塩辛く煮たものが多く、珍しくはあっても、おいしいというほどのものではなかった。それにまたべらぼうな量である。また、いかにも男性上位の土地らしく、この店では男は女にお酌をすると罰則があると言う。マスターは女性にビールをついだ男性に、中世の首かせをカチカチ鳴らして警告してみせた。今では首かせの代わりに歌を歌わせられるようだ。

2日目(9月3日)は開会の辞にひきつづき早速シンポジウムにはいった。主題は術前、病態生理、術中というおおまかなカテゴリーのなかで、それぞれ、患者の血行動態面からの評価、心臓麻酔患者の合併疾患の影響、各種心疾患の病態生理、麻酔薬の選択～吸入麻酔薬/静脈内麻酔薬、術中の薬物療法などについて講演が行われた。一般に総説ないし教育講演的な内容でとくに新しいことはなかったように思う。本会場での講演と並行して一般演題(ポスター示説のみで口演は無し)が行われた。といっても本会場で講演が進行している時間帯には説明者がいる必要は無く、ポスター示説の時間帯に展示場にいればよいようになっていた。演題は参会者による採点が行われ、優れたもの5編に3日目夜のパーティの席上、副賞が贈られ、4日目の閉会式で正式に表彰された。

この日は午後6時からミュンヘン市庁舎(写真)

において市長招宴があった。この建物は、日に何回かの時報とともに正面中央の塔屋にある人形時計が音楽に合わせて円舞を繰り広げることで知られているが、建物の内部もバロック後期というか、ビーダーマイヤーというか、とにかく古めかしい、そして豪華絢爛たる造りで目をたのしませてくれた。市長は自分が外科医という事もあってかどうか、みずから挨拶に見え、帰りには参会者と握手するなど、こちらが恐縮するほどのサービスぶりであった。

この後、演者および司会者への招宴がホテル「四季」で開催された。このケンピンスキー系列のホテルはカーター前大統領やヨルダン国王なども泊まったことがあるのを自慢にしており、古めかしい、格式高く、立派な所であった。

3日目(9月4日)は8時から早速シンポジウムに入った。主題は、体外循環、特殊な麻酔手技、心臓血管緊急症に対する麻酔管理、術後管理などであった。前日と同様、内容は知名人による総括的な話しが多かった。

私はハンブルク大学外科の Pokar 教授と共に、心臓血管緊急症の麻酔管理の部の共同司会をつとめた。参会者の大部分はドイツ人およびドイツ語圏からの人々であり、会の公用語である英語を一応話せるといってもやはりドイツ語なまりはきつく、とくに質問の扱いなど、司会は決して楽でなかった。サブテーマは4題で、米国アトランタにある Emory 大学の Waller 教授が PTCA、西独心臓センター・ミュンヘンの Barankay 博士が胸部大動脈りゅう緊急症、オランダ・ライデン大学の De Lange 博士が心タンポナーデを、そして英国ケンブリッジ・パップワース病院の Latimer 博士が心肺同時移植手術の麻酔について講演した。Latimer 博士は1984年くらい11例の心肺同時移植の麻酔を担当したが、われわれにない貴重な経験を持っているわけで内容は興味深いものであった。ただ、「所変われば品変わる」を地でいくような感じを受けたのは、麻酔の導入・維持に酸素・笑気・トリクロロールエチレンの組み合わせを使用している事であった。すでに過去のものと考えていたトリクロロールエチレンの登場に些かあつげに取られて、トリクロロールエチレンのどんなところが心肺同時移植手術の麻酔に適しているのか聞いてみた。あまり要領を得ない返事だったが、要

するに昔から使っているし、鎮痛作用も強く、たいへんよい麻酔薬だという。どうも何か議論が噛み合わないようで、それ以上聞くのはやめた。

この日はレディスプログラムでアルプス北麓の古城めぐりがあった。1日がかりのツアーなので私はじめその日学会に出席した人には縁が無かったが、森欧外の「うたかたの記」にも登場するノイシュワンシュタイン城やホーエンシュワンガウ城、ケーニヒスゼー、ヒトラーの山荘があったことで名高いベルヒテスガルテンなどがコースに含まれていた。芸術に傾倒し、城にお金をかけすぎたルードビッヒ王が、ついに破産したあげく湖で怪死を遂げた悲話もある場所でもあり、充実したツアーだったという。

午後8時から市の中心部にあるホーフブロイハウスで「ババリアの夕べ」が催された。アルペンホルンの吹奏、鞭鳴らし、腿たたき、きこり実演はじめババリア地方独特の男性的というか、野性味たっぷりというか、とにかくビールの大ジョッキを傾け、おおぶりなドイツ料理をほお張りながら鑑賞するのにぴったりだった。ナチ党創生期の

ころヒトラーがこのビアホールで再三演説会を催したことは有名だが、人々はあまり触れたがらない。

最終日には2題のパネルディスカッションが行われた。「心疾患患者のモニタリングに何が不可欠か?」「心筋保護心筋保護一周術期における基本概念」であった。とくに前者では、Kaplan教授が従来から広く用いられてきた心電図、心室機能曲線などとともに、混合静脈血酸素飽和度の連続監視、右室駆出率測定、経食道エコー(2D-TEE)による心運動モニタリングの重要性を強調した。

とくに目新しいことは無かったが、従来業績のうえにさらにいくつかの工夫を積み上げ、全体として重厚な充実した内容のシンポジウムだったと言えよう。

本会は9月7~13日にオーストリアのウィーンで開かれた第7回ヨーロッパ麻酔学会総会の関連会議として開催された事もあり、参会者の多くはミュンヘンからウィーンへ移動したようであった。

* * * * *

* * * * *

* * * * *